

# 原爆の図は ふたつあるのか

特別公開



原爆の図 第1部 幽霊 (部分)  
1950年 丸木位里・丸木俊 原爆の図丸木美術館蔵



原爆の図 第1部 幽霊 (再制作版、部分)  
1950-51年頃 丸木位里・丸木俊・濱田善秀ほか 広島市現代美術館蔵

2016年3月19日(土)～6月18日(土)

原爆の図 丸木美術館

埼玉県東松山市下唐子1401

電話0493-22-3266

原爆の図は  
ふたつあるのか



原爆の図 第1部 幽霊（再制作版） 丸木位里・丸木俊・濱田善秀ほか  
1950-51年頃 広島市現代美術館蔵



原爆の図 第2部 火（再制作版） 丸木位里・丸木俊・濱田善秀ほか  
1950-51年頃 広島市現代美術館蔵



原爆の図 第3部 水（再制作版） 丸木位里・丸木俊・濱田善秀ほか  
1950-51年頃 広島市現代美術館蔵



1952年1月27～28日に開催された三菱美唄炭鉱労働組合本部「総合原爆展」会場。第3部《水》の再制作版が展示されている。加筆前の貴重な写真で、現在の再制作版と比べると、背景の墨の流され方が大きく異なっている。（写真提供＝本間シゲ子）

丸木夫妻は、1950年末頃に米国で《原爆の図》を展示したいとの依頼を受け、作品が紛失したときのために、当時アトリエに寄宿していた濱田善秀や若い画家とともに三部作を「模写」（再制作）しました。結局、渡米直前に不安を感じて断りましたが、それらの作品（仮に「再制作版」と呼ぶことにします）はその後、《原爆の図》の全国巡回展が盛況になり、同時に複数の場所から依頼が来るようになると、「本作」と同様に各地で頻りに展示されます。

《原爆の図》巡回展を手伝った大学生によると、作品がオリジナル（仮に「本作」と呼びます）と異なることに気づいた学生たちの間で、「再制作版」を展示することに対して、ちょっとした議論が起きていたそうです。「小説と違って画家は絵を印刷できないのが悩みだ」「ピカソが《ゲルニカ》を模写して展示するなんてありえない……」。俊も、「絵の前で冷汗を流しながら、言葉だけはだんだんはげしくなっていくのです。絵で感じられない感動を言葉で伝えようとするのでしょうか」と苦悩を記しています。

一時は、作者自身が「門外不出」にした時期もありましたが、1974年に丸木美術館栃木館（栃木県岩舟町）が開館すると、丸木夫妻は加筆し、「本作」と異なる独自の表現の《原爆の図》として栃木に送り出します。その後1996年の栃木館閉館にともない、「再制作版」は広島市現代美術館に寄贈されました。

従来知られる「本作」とともに《原爆の図》として扱われながらも、やがて異なる数奇な道を歩んだ「再制作版」。もちろん巡回先では、「模写」や「再制作版」と断って展示したわけではありません。当然、絵を観る人たちの反応も、「本作」とは変わりませんでした。

今展では、広島市現代美術館の協力を得て、この「ふたつの原爆の図」をならべて比較するという、これまで試みられたことのない展示を行います。「本作」と同様の役割を果たした「再制作版」は、ただの“影武者”だったのでしょか。それとも「本作」とは別の、独立した作品なのでしょうか。

「原爆被害を伝える」という社会的使命を担った作品における「再制作」の意味とは何か。「模写」を「加筆」した作品の、オリジナリティはどのように考えるべきなのか。こうした問題は、たんに《原爆の図》だけにとどまらず、芸術表現の根源に迫る機会になるのかもしれない。

※5月中旬より、兵庫県立美術館への貸出のため、「本作」（丸木美術館蔵）の第1部《幽霊》は複製展示となります。どうぞご了承ください。

映画『原爆の図』上映

4月16日（土）～6月18日（土）



1953年公開、新星映画社、岩崎昶製作、今井正・青山通春監督、モノクロ17分  
1950年代はじめの《原爆の図》制作と全国巡回展の様子を記録した貴重な映画を上映します。

## 第2部：原爆の図の周辺と1950年代 4月16日(土)～6月18日(土)

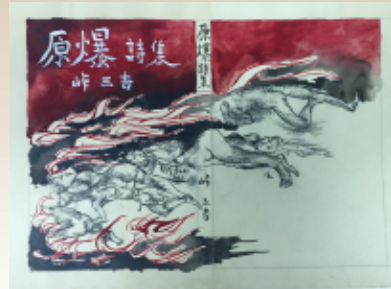
《原爆の図》再制作版の展示に合わせて、初期《原爆の図》制作の前後に描かれた丸木夫妻の人体デッサン(原爆の図丸木美術館と広島平和記念資料館所蔵)を展示します。また、当時の巡回展にかかわった峠三吉やヨシダ・ヨシエの肖像スケッチをはじめ、関連資料を紹介します。



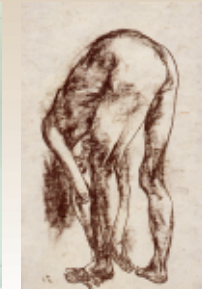
峠三吉氏像 丸木俊  
1950年10月  
広島市中央図書館蔵



ヨシダ・ヨシエ氏像  
丸木俊 1950年夏  
原爆の図丸木美術館蔵



原爆詩集カバー原画 丸木俊  
1952年 広島市中央図書館蔵



原爆の図のための  
デッサン 丸木俊  
広島平和記念資料館蔵



原爆の図 八月六日 丸木位里・丸木俊  
1950年11月 広島平和記念資料館蔵

### 1950年代幻灯上映会 協力：神戸映画資料館

4月23日〔土〕午後2時 一般1000円・18歳以下500円(入館料別途)

1950年代、幻灯(スライド)は、手軽に上映できて自作も可能な融通性の高い映像メディアとして、原水爆禁止運動をはじめとする社会運動の場でも盛んに活用されていました。この時期、映画、演劇、写真、文学など、さまざまな分野の専門家が幻灯製作に関わり、それぞれの職能を活かしたユニークな作品の数々を創作しました。今回の幻灯上映会では、記録写真、人形劇、そして彩色画による幻灯3本を、フィルムと幻灯機によって上映します。幻灯が社会運動の中で担った多様な役割と、個々の作品としての多面的な魅力を再確認するとともに、世界的に活躍する活動弁士片岡一郎氏の口演により、幻灯のライブ・パフォーマンスとしての面白さも体験できる機会となるでしょう。

※本プログラムはJSPS科研費15K02188「昭和期日本における幻灯(スライド)文化の復興と独自の発展に関する研究」(研究代表者：鷲谷花)の助成による



### ゆるがめ平和を—8.6 原水爆禁止世界大会記録— 1955年

製作：原水爆禁止世界大会準備会/脚本・構成：古志峻/協力：原爆被害者の会、八・六世界大会共同デスク、日本幻灯文化株式会社、関西幻灯センター/フィルム提供：神戸映画資料館

1955年8月6日に広島市にて開幕した第一回原水爆禁止世界大会の記録。製作実務の大半は、全大阪映画サークル協議会内の幻灯関連部局だった関西幻灯センターが担当した。当時関西幻灯センターのメインスタッフだった古志峻が、自ら現地広島に赴き、撮影チームのリーダーだった田村茂以下、各参加団体のカメラマンたちが撮影した記録写真を構成・編集し、説明台本を書き下ろして完成した。第二回以降とは異なり、第一回原水禁世界大会に際しては記録映画が製作されなかったため、本作は映像による貴重な報告資料となり、当時関西幻灯センターが製作した幻灯の中でも、特に売れ行きが好調だったという。

### せんぶりせんじが笑った! 1956年

原作：上野英信/美術：勢満雄/撮影：菊地利夫/製作：日本炭鉱労働組合/配給：日本幻灯文化社/脚本改訂：上野朱/上野朱氏所蔵のオリジナルプリントから作成したニュープリントを上映

上野英信の文、千田梅二の版画による原作『せんぶりせんじが笑った!』は、まず1954年にガリ刷りの私家版(『えばなし せんぶりせんじが笑った! 他三篇』)として刊行され、翌55年に柏林書房の「ルポルターージュシリーズ 日本の証言」の一冊として新書版が刊行された。炭労の委託により日本幻灯文化社が手がけた幻灯版では、精巧に作られた人形とミニチュアセットによって、中小炭鉱の労働者の生活と労働がリアルに再現されている。美術担当の勢満雄、撮影担当の菊地利夫は、ともに満州映画協会(満映)に技術者として入社し、日本敗戦後も中国大陸に残留、満映の設備と人材を引き継いで設立された東北電影公司(東影)に参加し、新中国の映画事業の建設のために働いた経歴をもつ。東影が一時拠点を移した産炭地区の興山での生活体験や、勢が美術スタッフとして参加した中国初の人形アニメーション『皇帝夢』(陳波児監督、持永只仁〔方明〕撮影、1946年)の経験が、本作の空間設計のリアリティに寄与していることは確実といえるだろう。



### ピカドン 広島原爆物語 製作年不詳

文・絵：赤松俊子 丸木位里/製作：プロダクション星映社/提供：日本光芸株式会社

1950年8月に赤松俊子・丸木位里の発表した絵本『ピカドン』の幻灯版。タイトル画面及び説明台本に製作年は記されていないが、神戸映画資料館所蔵のフィルムのエッジには「52-AJ」の印字が読み取れるため、1952年前後には完成したものと推定される。原作絵本は占領下の事後検閲により流通が制限されたため、1950年代に『ピカドン』を大衆的に普及することができた唯一のメディアが、この幻灯版であった可能性もある。幻灯版は、原作絵本のモノクローム画を彩色して映像化しており、また、場面の削除や順序の入れ替え、テキストの変更など、かなり大きな独自改変が加えられている。製作元のプロダクション星映社は、記録映画作家でもあった谷川義雄が主宰していた幻灯スタジオで、本作のほか、ソ連の社会や文化、科学技術を紹介する幻灯のシリーズなども製作している。